

フィールドワーク便り

ロニヤガトロロの木陰

佐川 徹*

ぼくがくらしていた村はニエキーキ村という。エチオピアの田舎町から30キロほど南へくだったところにある。この村を「発見」したときの喜びは忘れられない。調査村を求めて夜明け前に町を発ったものの、1日目はどこまで歩いても乾いた荒野、汗と砂埃ばかりが目にはいる。2日目は河辺林にはいり涼しくなったが、今度は朝方の豪雨のせいで足元がおぼつかない。かついだ荷物も重くなる。3時間ぐらい泥道を歩いたころ、突然視界がおおきく開けた。砂埃のかわりに目に飛び込んできたのは、どこまでも続く一面の緑に点描のような彩りを添えてすすむ、数えきれぬウシやヒツジの姿だった。ニエキーキ村

はそこにあった。

この村にはダサネッチという人びとがくらしている。ぼくはかれらの日常生活の一端を明らかにするためにそこで調査をした。だがこの文章では、かつてニエキーキ村にくらしていた別の民族の青年にまつわる話をする。ぼくはかれの名を村の木陰で知った。

ダサネッチの一日はコーヒーとともに始まる。いちばんに起きてこれを沸かすのは妻の役目だ。これから抱えるほかのたくさんの仕事をこなすためにも、女たちは濃いコーヒーですっきりと目を覚まさなければいけない。母親から手渡された熱いコーヒーを熱いまま飲んで家から出て行くのは少年や青年。家畜の草地と水場を求めて一日中炎天下を歩くきつい務めが待っている。

汗を流して仕事に励むこれらの人びとと対照的なのは年長の男たちだ。かれらはコーヒーをゆっくり冷ましてから飲み終わると、村はずれにある木陰へと向かい、陽が落ちるまでの時間をここで過ごす。高さ15センチほどの携帯いすを背もたれにして友人との会話を楽しみ、話し疲れるといすを枕がわりに



写真1 ニエキーキ村の風景
オモ川の氾濫がこの地に緑をもたらす。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

目を閉じる。たっぷり休みをとると今度はナイフを取り出して杖やいすの手入れをし、腰にまいた毛布のほつれを針で縫い合わせる。木陰に一步足を踏み入れば、ぎらぎらの太陽に照りつけられた外とは別世界、適度に涼やかな風が汗をかかわかし、素足から伝わる地面のひんやり感が心地よい。このような木陰は各村にかかわらずひとつはあり、成人男性であればだれでもそこへ出向いて会話に参加できる。いわばここは仕事のない男たちの集いの場である。ぼくも午前の調査に疲れると木陰へ向かい、夕方までなにもせずにごす。

ニエキーキ村の木陰はぼくがこれまで見たなかでもっとも立派なものだ。木陰をつくる木の胸高直径は約 2 メートル、高さも 15 メートルほどある。木の周囲には大人の背丈を優に越えるまでに育ったモロコシの茎が、木陰を守る壁のようにそびえている。このあたりはもともと、村のすぐそばを流れるオモ川の河辺林であったのだが、この一本の巨木を残して切り開かれ畑となった。川が氾濫する季節が近づくと、村人は木陰の周囲に家ご

と移動してくる。やや小高くなったこのあたりにまでは洪水も及ばない。人びとは木に寄り添い水が引くのを待つ。

村人はこの木陰をロニヤガトロロと呼んでいる。ふつう木陰は木の種類を示すことばで呼ばれる。たとえばミエデ (*Cordia gharaf*) の木がつくる木陰に出向くときには「ミエデに行く」という。しかしロニヤガトロロは例外だ。甘さと渋みが入り混じった、乾くと薄茶色になる実を落とすこの木の名前はキナッチ (*Ficus sycomorus* : イチジク) である。村人によればかつてはこの木陰もキナッチと呼ばれていたという。だが 10 年ほど前に名前を変えた。べつにだれかが変えろと主張したわけではない。あるできごとを契機に自然とそう呼ばれるようになったのだ。ロニヤガトロロとは、ニエキーキ村にいらしていたトゥルカナの青年の名である。

トゥルカナはケニアとの国境をはさんでダサネッチに隣接する牧畜民である。両者はもともと友好的な関係にあったとされる



写真 2 ニエキーキ村の畑

モロコシの収穫を終えたばかりの畑にウシを放牧している。



写真 3 ロニヤガトロロの木陰

一年でもっとも多忙な収穫期には人影が途絶えた。



写真4 木陰で髪を整えてもらう青年

が、20世紀はじめに関係が悪化してから今日にいたるまで、断続的に戦いを繰り返してきた。最近では2000年にダサネッチが「邪術にかかった戦い」と呼ぶ紛争があり、百人以上が死傷したといわれる。しかし戦いはいつまでもつづくわけではない。双方の年長者と政府関係者が集まって会合を開き、その場で家畜を殺してともに肉を食べることで和平がもたらされる。すると人びとは国境を越えてたがいの土地を往来しあう。ダサネッチにとってトゥルカナはよき交易相手で、みずから生産したタバコやモロコシをトゥルカナのヤギやヒツジと交換する。

ロニヤガトロロが父親とともにニエキーキ村へやってきたのも、そのような平和な時期であったという。ふたりが移住してきた理由は知られていない。この地に暮らしはじめてまもなく、父親は病気で死んでしまう。ロニヤガトロロはまだ5、6歳であった。この地に親戚などいるはずもない少年は、近所に住むダサネッチに引き取られ、「ダサネッチとして」育てられることになった。成長した少年はほかのダサネッチと同じように成人

儀礼をおこない、ダサネッチの女性と結婚した。モロコシをつくるための畑も分配され、家畜も手に入れた。すべてが順調だった。

だが不幸は突然襲ってきた。ある日、町から買ってきた酒で悪酔いしたブイテという男がかれの家を訪ね、食事を出すように求めた。ロニヤガトロロが「モロコシはない」と答えると、ブイテはそれなら今すぐに穀物庫をあけるという。かれは酔っ払いの相手などする気はないと無視を決め込んだ。これにひどく怒ったブイテは近くの家から銃をもちだした。もともと酒癖が悪く乱暴な男として知られていた。ロニヤガトロロはブイテを避けて家を出た。それで相手が静まると思ったのだろう。だがかれはあとを追ってきたブイテに撃たれて死んだ。キナッチの木の根元だった。ほんの10年ほど前のことであるという。つまり、木陰により正確な名前を付ければ「ロニヤガトロロが命を絶った木陰」ということになる。

ダサネッチがダサネッチを殺すことはもともと忌むべきことである。そのような殺人者をニョギッチというが、人びとはこのことを口にすることも嫌う。穢れたニョギッチの存在は社会に混乱をもたらすため、殺人者はすぐに浄化されなければならない。かれは家にある土器やミルク入れなど、いっさいの家財道具を地面にたたきつけて割る。つぎに他人の犬とロバを捕えて殺す。そして村から隔離された藪のなかで2週間ほど過ごす。最後に親しいものからヤギの血を体に塗ってもらい、もとの居住地へ戻る。なんだ、それだけかと思うかもしれない。ニョギッチにはわ

れわれが考えるような「刑罰」が科せられるわけではない。しかしその後の人生で、かれが人びとから真の信頼を得ることはない。

一方、ダサネッチがトゥルカナなどの「敵」を殺した場合には、何者をも恐れぬ勇敢な男として称えられる。かれにはその勇敢さの証として胸一面に1.5センチほどの傷がナイフで刻まれる。このチェデと呼ばれる傷を身体に刻印された男の発言は、社会におおきな影響力をもつ。

事件のあと、ブイテの処分を決めるための会合が開かれた。その結果、ブイテは勇敢な男となった。死者は「ダサネッチの土地に住んでいたトゥルカナ」であったことが会合で「決定」されたのだ。どのような経緯でその「決定」がなされたのか、その場にいなかったぼくに細かな中身はわからない。たしかなのはブイテの胸に「敵」を殺した名誉の勲章が刻まれたことだ。現在かれはロクワレモイと呼ばれている。これは「トゥルカナを殺した人」に与えられる尊称である。

ぼくはよく「ダサネッチになるにはどうすればいいのか」とかれらにたずねてみた。「日本人」として同じ質問をされた自分を想定してみると、これは愚問である。ぼくには、「たぶん役人の書類審査があると思います」ぐらいのことしかいえない。だがこの地に住む人びとはそろって「われわれの土地に住み、われわれの女性と結婚し、われわれの儀礼をすることだ」と答える。必要なは生まれた場所ではなく生活をともにすることだ、とかれらはいふ。たとえ「敵」に分類さ

れる民族の出身者でも「ダサネッチになる」ことはできる。実際、現在「ダサネッチ」として生きる人びとに出自をたずねると、近隣にくらす民族から移住してきた人の子孫はおおい。これはこの地域の先行研究でも指摘されてきたことだ。もっとも、移住してきた第一世代は「本当のダサネッチ」ではない。だがその子供は「本当のダサネッチ」だ。

そうであるならば、ロニヤガトロロはすでに「本当のダサネッチ」であったはずではないのか。こう村人にたずねると「トゥルカナはトゥルカナなんだ」、そんな答えしか返ってこなかった。ぼくはこの答えに割り切れないものを感じ、何度も同じ問いを繰り返したことを覚えている。そして、会ったこともないロニヤガトロロが「ダサネッチになれなかった」ことが、とても不条理に思えた。

その理由はふたつあったと思う。ひとつは単純なことで、ぼくはブイテが苦手だった。かれのことは以前から知っていた。村にくらしはじめてすぐのころ、オモ川で水浴しているとちょっかいをだしてくる男がいる。おまえを川に沈めることができる、笑いながらそんなことをいわれた。それがブイテだった。べつにぼくは気にならなかったが、その場にいた友人たちは憤慨していた。冗談であってもわれわれとともにくらしている男にそんなことをいうのはけしからん、ということらしい。以来かれとは相性が悪い。そのうえいまでも酒を飲むと暴れる。ブイテは勇敢かもしれないが、尊敬するには値しない。だからぼくはロニヤガトロロの立場にたって話を聞いていたのだ。

もうひとつの理由はぼくの素朴な思い込みと関係している。生活をともにすることで「ダサネッチ」になれるというかれらのことばは、ぼくにはとても魅力的に響いた。それは「役人の書類審査」でのみ帰属先を決められてしまう「日本人」とは対極にあるように思えた。だがロニヤガトロロの話はそんな魅力的なことばと矛盾しているように感じた。

その矛盾は自分自身の経験とも重なりあってみえた。たとえば、ぼくがくらす集落を通りかかった人はよく「ディキの息子がこんなところでなにをしているのだ」と口にした。ディキとはかつてこの地にくらすキリスト教の宣教師の名前であるが、その名はダサネッチとは異質な世界を生きる「白人」一般を指すときにも用いられる。この問いに村人はこう答える。「いやこいつはディキではない。われわれのやり方を学んでいるわれわれの男だ。ことばもできるし、車は使わない。ここまで歩いてきた足をもった男だ。家畜を殺して息子の世代組にも入った。あとは結婚するだけだ」。そんなことを耳にするとぼくはただうれしくなってしまう、その場から離れる。

しかしその同じ村人が、ぼくにカネをせびるときには決まり文句のようにいう。「白人の体はカネでできてるんだろう」。べつに悪気があるわけではない。単にこれまでの「白人」に対する経験にもとづいていっているだけだ。そうわかっているから腹がたつ。そのたびに、自分の体はカネでできていないことをいちいち説明する。

ぼくはそんなことに一喜一憂していた。だ

から「ダサネッチになった」はずの青年の話がただの他人事には思えなかった。もちろん「トゥルカナ」と「白人」はちがうし、ぼくが村でくらすのはわずか半年だ。それでも、ロニヤガトロロが「トゥルカナ」にされたことは、自分が「白人」で片付けられたことと同じように納得がいかなかった。

フィールドにいるあいだはなにか過剰な思い入れがあり、矛盾は矛盾としてとどまりつづけた。フィールドを離れてから考えてみると、ぼくが感じた「不条理さ」は上に書いたような理由で説明できるのだと思う。そしてそのような思い入れからすこし離れて、この話をもう一度考えなおしてみた。

「トゥルカナ」として死んだロニヤガトロロは、人びとの記憶から失われていく運命にあったはずだ。かれの名を語り継ぐ動機をもった人はいない。せいぜいブイテが酒の席での自慢話にするぐらいだ。その名がたまたまニエキーキ村の木陰に残ることがなければ、ぼくにかれの話を知る機会はおとずれなかったであろう。一方、ぼくが「ダサネッチになる」方法をたずねた相手は、いずれもすでに「ダサネッチになった」人びとであった。かれらは自分の祖先が「ダサネッチになった」経緯を語り継いできたはずだ。ぼくはかれらのことばに、先行研究で指摘されていた帰属意識の「柔軟さ」を見出して安心し、それと矛盾したロニヤガトロロの話には戸惑いを覚えた。

だがロニヤガトロロの存在を知ったぼくはむしろ、かれと同じように「ダサネッチにな

れなかった」人びと、そしてかれとちがって名を残すことがないままこの地を去り、あるいはこの地で死んでいった人びとの存在に思いをはせるべきだったのかもしれない。「なれなかった」理由はさまざまだろう。酔っ払いに殺された、子供がいなかった、畑や家畜を手に入れられなかった…。ぼくは「なった」人びとのことばと「なれなかった」人びとの理由をともに考えることで、帰属にまつわるかれらの力学をより深く知ることができたのかもしれない。すくなくともそこには「不条理さ」だけで片付けることのできない、「役人の書類審査」ともその対極にある「柔軟さ」とも異なる論理があるのだと思う。それはいまのところ、新たな思い入れでしかないが。

昼過ぎになると木陰で寝てばかりいたぼくは、村人から「ロニャガトロロの男」と呼ば

れるようになった。もっとも、村の内外から人びとが集う木陰で無為にすごした時間は必ずしもムダではなかった。調査のためにほかの村を訪問したときに、ぼくは見知らぬ男たちからよく声をかけられた。「おまえのこと知ってるよ、このまえロニャガトロロで寝てたよな」。このひとことで緊張が解けて話はじまる。自分の存在がとりあえず相手に知られていることは、調査を進めていくうえでとても大切なことだ。その点においてぼくは運がよかった。たまたま「発見」したうつくしいニエキーキ村の木陰に体を横たえているだけで、「ダサネッチのやり方を学ぶ男／白人」の存在をおおくの人びとに知ってもらうことができたからだ。

ロニャガトロロは、ぼくにすこしのことを考えるきっかけを与えてくれた人であり、たくさんの人と出会うきっかけを与えてくれた木陰である。

オヴァンボの昆虫食と幻のおかず

藤岡 悠一郎*

フィールドに滞在しはじめて1ヵ月ほどたったある日、私は村の青年と一緒に歩きながら、さっき鳴いていたセミの話をしていた。ここはアフリカ大陸の南西にあるナミビ

ア共和国の北部の村、ウウクワングラ村である。この村に暮らしている民族はオヴァンボ(Ovambo)という。彼らは、年間平均降水量が400-500ミリメートル程度と農耕には厳し

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

い気候下で、ウシやヤギを飼育しながら乾燥に強いトウジンビエを主に栽培している。乾季も終わりに近づく10月半ば、村ではあちらこちらから「ジーーーー」というセミの低い鳴き声が聞こえてくる。彼との雑談の話題は、「こんな乾いた季節にセミは何を食べているのか？」というようなことだった。カイタという名の青年(19)は「セミはアカシアの木の汁をすうんだ」と教科書的な答えを返してきた。だが、そこから話題は思わぬ方向に展開した。「ところで日本人はセミを食べるのかい?」「ぼくは食べたことないけど、君たちは食べるの?」もともと昆虫が好きであった私は、どんな昆虫をどうやって食べるのか、大きな興味がわいてきた。フィールドで植物の調査に着手していた私は、このことを契機として昆虫を食用とする彼らの食文化(昆虫食)に魅かれ、次第にのめりこんでいくこととなるのである。

昆虫食は世界各地でみられ、アフリカでは特に中部・南部に広く分布し、イモムシ・ケムシの類やバッタ、シロアリ、ミツバチなどが食用とされている。日本でもハチノコやイナゴなどを食用とする食文化が各地に存在し、実はセミを食用とする地域もあるようだ[三橋 1997]。しかし、日本では昆虫食というと、日常の食事というよりも、どちらかといえば「ゲテモノ」としての扱いをうけることの方が多いだろう。

雨季に入った12月、私は村人に昆虫食のことを本格的に聞いてみようと思うようになった。カイタ青年の情報によると、オヴァンボは11種類の昆虫を食用とするそうだ。

そのうち5種類は蛾の幼虫であるイモムシの類で、そのほかにはコガネムシの幼虫、ノコギリカメムシ、タマムシ、セミ、シロアリがある。イモムシ5種のうち、ヤママユガの幼虫2種は、モパネ(*Colophospermum mopane*)というマメ科の半落葉高木を食草とするため、モパネワームという英名で知られている。モパネ林が広く分布するナミビア北部では、モパネワームを食用する人が多く、町のマーケットでは販売もされている。しかし、ウウクワングラ村では、モパネワームよりもドクガの幼虫であるオカナンゴレ(*Okanangole*)の方が好まれるようだ。若干固いモパネワームや牛肉などと異なり、脂がのってやわらかい点がいいという。このイモムシはマメ科の落葉低木であるアカシア(*Acacia arenaria*)を食草とする。ウウクワングラ村では毎年のように発生し、かつてはたくさん採れたそうだ。しかし、最近ではほとんど発生しなくなった。

モパネワームもオカナンゴレも調理法はほとんど同じである。まず、少量の水と塩



写真 1 丸々と太ったオマヘンコエ(モパネワームの1種)



写真 2 火を通して乾燥させたオマヘンコエ
すぐに食べない場合はこの状態で保存される。



写真 3 オシフィマ（トウジンビエ粉の練り粥）
とオマヘンコエ
オヴァンボのある日の夕食。

を素焼のつぼに入れて煮立て、イモムシを入れる。そして水が完全に蒸発し、乾燥したらできあがりである。これをオヴァンボの主食であるオシフィマ（Oshifima：トウジンビエ粉の練り粥）のおかずとして食べるのである。最近では乾燥させたイモムシを再び少量の水と市販の固形スープと一緒に煮込み、煮汁とともに食べる方法もあるそうだ。カイトはオカナンゴレが大好きで、「おかずのなかでは最もうまい」という。町で売られるよう

になったピザも彼の好物のひとつであるが、「ピザの上にあのイモムシをのせて食べたら最高だろうな」とも語った。彼一推しのイモムシ、オカナンゴレをまだ食べたことなかった私は、その感覚をまったく共有できなかった。だが、昆虫の味の評価がオヴァンボの社会では意外と高いのではないかと感じていた。「これはひょっとしたら昆虫をかなりの頻度で食べているのではないだろうか？」という期待をひそかに抱きつつ。

ある日、私はウウクワングラ村生まれのアセリさん（60歳前後）の家を訪ねた。その女性は学校から帰ってきた子供たちと一緒に木陰で休んでいた。私が「役にも立たないこと」をいろいろ調べているのを知っているので、その日も「今日は何が知りたいの？」と招いてくれた。私はすかさず「食べられる虫について知りたい。オヴァンボの人たちはどんな虫を食べるのですか？」という疑問を投げかけてみた。するとどうだろう、そのおばさんとその周りにいた子供たちが大笑いしたのである。ちょっとした緊張につつまれていたその場が一気に和やかなものとなったのは幸いだった。しかし、私にはなぜ笑われたのか、その意味がわからなかった。というのも、今までほかの質問をした際にはそのような反応が返ってきたことがなかったからである。ある子供は、笑いながら「わー」と奇声を発していた。その後、おばさんは私の質問に丁寧に答えてくれたので、そのときはその「笑い」に対して特に深く考えることはなかった。しかし、そのほかの家で尋ねたときも、同じような反応にでくわすことがしばし



写真 4 カイタ青年の描いた「幻のイモムシ」、オカナンゴレ

ばあった。

その「笑い」はなぜ起こったのだろうか？「ゲテモノ食い」というような、昆虫を食べる人を侮蔑的にみる意識があるのだろうか？

一部の昆虫に関しては、それを食べる人に対してそのような言い回しがされることがある。たとえば、「エエサクラシャ (*eesakulatha*: シロアリ) を食べるのは〇〇だ」「エエサクラシャは〇〇の食べ物である」といった具合である。この場合、〇〇にはオヴァンボを構成するサブグループの名前が入る場合が多い。しかし、シロアリなど特定の種類の昆虫以外では、そのような言い回しがされることを聞いたことはない。私が滞在していた雨季の間にほぼすべての世帯がなんらかの昆虫を食し、その大笑いした世帯でも数回食べていたことがあとでわかった。しかも、その食べ方は他の人に隠れてこそこそ食べるというようなものではなく、場合によっては近所の人と一緒に食べることもあった。この社会では、昆虫は「ゲテモノ」ではなく、日常の「おかず」のひとつなのである。オヴァンボ

の言葉でおかずはオムウェレロ (*Omwelelo*) というが、昆虫もその一品とされる。たとえば、「好きなオムウェレロは何？」と聞くと、魚、肉、ミルクなどと並んでオカナンゴレやエグング (*egungu*: モパネワーム)、エンダンガリ (*endangali*: コガネムシの幼虫) などがあげられる。とはいうものの、その食用回数には世帯差が大きく、昆虫食には世帯あるいは個人の嗜好の差が強くあらわれるようだ。やはり昆虫を食べる人は変わり者で、昆虫食の質問をした私もそのように思われたのだろうか？ また、笑われた理由としてもうひとつ考えられるのは、外国人である私が昆虫のような食べ物を知っていたことに驚いたということである。しかし、どうもニュアンスが違う気がするのである。確かに、昆虫食以外のものでも、「おまえよくそんなことを知ってるな」という笑いが生まれることはある。しかし、昆虫の時のような手放しの大笑いではなく、そのときはむしる感心の気持ちを含む笑いであった気がするのだ。

調査も終盤に差しかかってきた2月、サカリヤ氏 (62歳) と雑談をしていた時に、次のような話を聞く機会があった。「オカナンゴレは実にうまかった。毎年雨季になると決まってあられ、特に雨の少ない旱魃の年に多く発生したものだ。あれを採るときに毛が手に刺さってかゆくなったけど、それでも採ったものだ」と語ってくれた。またアビネル氏 (70歳前後) は、「オカナンゴレを煮ているときに牛乳の脂肪分を少しいれると、香ばしいかおりがするんだ」と話し、それがいかにすばらしいものであったかを語ってく

れた。また、「イモムシたちはアカシアの葉を食べるので、大量に発生したときは村のアカシアが丸坊主にされ、ヤギの餌がなくなってしまうこともあった」という。しかし、そのような思い出話とともに、2人とも「ここ10年ほどはまったくみられなくなってしまった」ことを強調する。その理由として、アビネル氏はアカシアの木が減少した点を指摘する。「人が多くなり、アカシアを切って畑にしてしまったので、オカナンゴレがいなくなってしまった」という。そこからの話題は地域の自然環境がいかにかわってしまったか、ということに移った。ウウクワングラ村のあるナミビア北部は、雨季に洪水の押し寄せる季節河川（現地語でオシャナ：Oshana）が何本も走っている。村のすぐ横にもオシャナがあるが、昔はそこにたびたび水が流れ、そのすぐわきにあるアビネル氏の家もしばしば水に浸かったそうである。その洪水は畑に水を与え、そこに生えている樹木を育む大切な機会であったが、現在ではそれがほとんどなくなってしまったという。

このような自然環境の変化と同時に、オヴァンボの生活様式も急速に変化しつつある。1990年に独立を迎えたナミビアは、観光業の発達などにもなって、住民の生活水準もよくなりつつある。ウウクワングラ村から10キロメートルほど東にある地方都市のオシャカティには、南アフリカ資本のスーパーマーケットが並び、村人もしばしば食材を買いに行く。そのため、村人の食卓には購

入で得たパンや米などの食材が目につくようになった。また、住居の様式が従来の樹木を使ったものからトタンなどの材を使ったものへと移り変わり、さらには携帯電話が次第に普及しはじめるなど、近代化の波がさまざまな面で押し寄せつつある。

オカナンゴレの発生がなくなった現在、オカナンゴレがおかずの一品になっていたという事実は過去のものとして忘れ去られつつあり、また生活様式の移り変わりはそれがおかずの一品になるという意識すらも変えつつある。かつてほとんどの世帯でおかずとして利用されていたオカナンゴレは、現在ではもはや「幻のおかず」なのである。もちろん、その一方で一部の昆虫は現在も「おかず」として用いられているのだが、昆虫の利用量全体は減少傾向にある。聞取りの際に「笑い」が生じたのは、いまだきそんな「古い」おかずで外国人の私が注目することに違和感を覚えたためではないだろうか？しかし、私にはその笑いのなかに、どこことなくもの悲しさを感じて仕方なかったのだ。年長者の昆虫食に関する語りそのものからは、日常的なおかずの一品としての重要性や昆虫に対する深い思い入れが伝わってくる。「本当にそれでいいのだろうか？」という微かな戸惑いが、笑いのあとの静けさから感じられるのであった。

引用文献

三橋 淳. 1997. 『虫を食べる人びと』平凡社.